

第7回夏期福音特別集会（伊香保）

狹き門

——マタイ伝7章1～23節——

1960年8月19日
小池辰雄

神さまが追い詰めた場 福音 自己義認 いかにして神の前に義たり得るか 神との交わり
 私が取り除いてやるよ 充満しているところの無 天鐘 内村鑑三の本を求めるよ キリストを
 求める 十字架のキリスト 我既に世に勝てり 靈力的宗教か、道念的福音か 靈的道念 十
 字架におけるパプテスマ せざるを得なくなつてくる 四つの非す 恩寵における碎け 福音
 的実存の路 人間らしく生きているか 『靈力的宗教か道念的福音か』（参考）

【マタイ7】

¹なんじら人を審くな、審かれざらん為なり。²己がさばく審判にて「己」もさ
 ばかれ、己がはかる量りにて「己」も量らるべし。³何ゆえ兄弟の目にある塵を
 見て、おのが目にある梁木を認めぬか。⁴視よ、おのが目に梁木のあるに、
 いかで兄弟の目より塵を取り除かせよと言い得んや。⁵偽善者よ、まず己が
 目より梁木をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき
 得ん。

⁶聖なる物を犬に与うな。また真珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏
 みつけ、向^かき^{かえ}反りて汝らを嘙みやぶらん。

⁷求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さら
 ば開かれん。⁸すべて求むる者は得、たずねる者は見いだし、門をたたく者
 は開かるるなり。⁹汝等のうち、誰かその子パンを求めるに石を与え、¹⁰魚を
 求めんに蛇を与えるや。¹¹然らば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子
 らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わ
 ざらんや。¹²然らば凡て人に為られんと思うことは、人にも亦その如くせよ。
 これは律法なり、預言者なり。

¹³狹き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る
 者おおし。¹⁴生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。
¹⁵偽預言者に心せよ、羊の扮装して來れども、内は奪い掠^{かす}むる豺狼^{おおかみ}なり。
¹⁶その果によりて彼らを知るべし。茨^{いばら}より葡萄^{ぶどう}を、^{あざみ}より無花果^{いちじく}をとる者あ
 らんや。……



²¹ 我に對いて主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます。我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。²² その日おおくの者、われに對いて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為ししにあらずや」と言わん。²³ その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

●神さまが追い詰めた場

この夏は、私個人としてはいろいろ仕事が忙しくて、実はこの大集会を開く計画はしたものの、せつかく皆さんがあちこちからいろいろな事情を乗り越えてお集まりになつたのですが、それに対しても私は一向に準備ができないので、無手勝流というわけです。何もない。そういうような申し訳ない者ですけれども、しかし、神さまの方で、私の準備でない準備と言いますか、備えをしてくださつたのです。それは私が今置かれている立場というものが、神さまが追い詰めた場です。それをただ私が告白すればよろしいと、こういうわけです。

とにかく、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書から一箇所ずつ選んで、四つの集会に当てようという、こんな乱暴な選び方も世の中に恐らくなかろうと思う。しかし、それが案外悪くなかったようです。私は軽々しく、「お示し」なんていうことは言わん。

今日はマタイ伝7章を『狭き門』と題してお話します。やはり、『狭き門』と選ばされたのには大いに意味があるだろうと思つております。今日はだいぶ新しい方もいらっしゃるようで、私の話は初めての方もいらっしゃるかと思いますので、多少、序言的なことを始めに申し上げて入ろうと思います。また、マタイ伝7章と言いましても、決して今日は、逐語的な解釈をするのでもなければ、まとまつた筋道の通つたお話をするのでもない。大体、私はいつもそんなわけですけれども。

語るも聞くも同じことです。私たちはここで聖書の知識や解説を学ぶのではなくて、この集会におきましては、お互いま一緒になつて、また各人が各様な意味におきまして、深くキリストの生命をいただいていこうというわけです。大丈夫、皆さんはいただけますから。決して

「私はいただけるだろうか、いただけないだろうか。山から下りられるかどうか」なんて考へないでください。

「いただけない人は残つて祈つていろ」

なんて、そんな無責任なことは私は言いません。どうか、皆さん、大丈夫、いただいて帰れますから、安心してください。

いつも、申すことですが、どうか、聖書というものを、なにか勉強しようと思つたり、



解釈しようと思つたり、認識しようと思つたりして、これをご覧にならないように。聖書の文字の中から我々に今語りかけ、また、私たちに今つかみかかつてくるところの、そういう言、そういう現実に自分を投入していく。その時には必ず文句なしに、皆さん一人ひとりそれにふさわしいように、神さまは恵みを与えてくださるので、

「あの人のように私はどうも恵みが入りそうもない」

なんて、そんな心配はひとつもいらない。皆さん一人ひとりにふさわしいようになつてていきますから。どうか、そういう気持で、ひとつ樂に入つていただきたいと思います。

●福音

¹なんじら人を審くな、審かれざらん為なり。²己がさばく審判にて「己もさばかれ、己がはかる量りにて「己」も量らるべし。³何ゆえ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。⁴視よ、おのが目には梁木のあるに、いかで兄弟の目より塵を取り除かせよと言ひ得んや。⁵偽善者よ、まず己が目より梁木をとり除け、さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

イエスという方はこういった譬えの^{たと}ような言でもつて実に深遠なことを言つておられる。本当は、聖書は解釈しない方が一番いい。皆さんが家で聖書をお読みになるときに、じ一つこれを読む。そして、キリストの言どおりに、その現実の中に自分を置いて、これがいかなる現実を語つているかということを瞑想し祈つて、これを受けとつたときには——決してキリストは私たちが恐いと思うようなものではなくて——どんなその凄い言でも必ず、私たちを歓びのうちに、祝福のうちに引入る。キリストの言は決して審^{さば}きの言ではない。恵みの言です。だから、「福音」、よろこばしき音ずれと言う。外側から見ると、實に恐ろしい言がたくさんあります。けれども、キリストの言は、これを本当に受けとつてみると、みんな驚くべき豊かな生命の言であることが分かる。だから福音なんです。

このコツが分かつてきたら、もう聖書は本当に樂しくなる。たくさん読まなくていいですから、毎日必ずご飯をいただくように、これが本当に自分の魂の本当の生命の糧となるわけです。

「何々先生の集会に行かなければ、何々大集会に行かなければ、恵みに与^{あずか}らない」というような錯覚を来たしている人が世の中にはよくありますが、決してそんなものではない。キリストの恵みというのは、一人ひとりが絶対無条件に入るところの素晴らしい世界です。それ以下のものの何か条件がつくなら、私は福音だとは思わない。

●自己義認

とかく、人間は批評がましい。今度の『曠野の愛』誌34号の扉のところに、私が1930



年の元旦に藤井武先生をお訪ねした時のことと書きました。

「先生は、どうもクリスチヤンが批評がましくコセコセしていると慨嘆された」と。先生があの時に言われた面白い言葉があつた。私は正直、その時の先生の気持もその言葉尻も今でも髪髷としてくるようです。先生は実に、キリスト教会においても、あるいはまた無教会においても、独りの人であつた。先生がおられる時は実に少ない人にしか知られていなかつた。今でも相変わらず少ない人ですけれども。

要するに「人を審く」ということはどういうことかと言ふと、逆に言ふと

「己を義とする」

ということです。自分をよしとして、人をけなす。人を見下す。自己肯定をやつてゐる。自己義認をやつてゐるのが、これが人間の生まれつきの動きです。これを別な言葉で言ふと、エゴイズム、利己主義、自己中心、そして自己弁護ということ。「人を審く」ということが実は「罪」なんです。逆に言うと、「己を義とする」ということが「罪」なんです。その人は正直、非常に立派かも知れない。けれども、どんなに立派であつても、己を義とすることは罪なんです。そのことの一番いいサンプルは誰であろう、使徒パウロです。パウロはその書翰の中で多分二か所ちゃんとそのことを言つてゐるところがある。彼は

「自分は律法の義については責むべきところがない」

という道德的チャンピオンです。だから、人の欠点が見えてしようがない。

また、藤井武先生も立派な方だつたから、どうも人の欠点が目にについてしようがなかつたようなことを私に言われたこともありました。けれども、先生が書かれた

『あるクリスマスの感話』

という素晴らしい告白でもつて、完全にそれを乗り越えられた。

この自己義認というのは実はむしろ、立派な人にひとを審くことが大いにあるわけです。私はさつき註解書をちょっと見たら、そのことが書いてない。「自分の梁木」といふのは、なにか

「自分の中の大きな悪いことを知らないこと」
のよう書いてあります。そういう場合ももちろんあるでしょう。

「おのが目にある梁木を認めぬか」

という。「自分の目の梁木」とは、私たちの目の中に梁木なんか入りつこないんだけれども、キリストの言い方はずいぶん針小棒大な言い方をして法螺吹きだな、なんて思うかも知れない。文字通りに読むとキリストもずいぶん法螺吹きですよね。目の中に梁木なんか入りはしない。けれども、そういうような表現で言われるほどに、人間の自己義認というものが根強い、しようがないものだというわけです。

「自分を義としている」

ことが即ち「おのが目の梁木」です。己を義とするということは、神さまをいい加減にし



ているということです。人に対しても己を義認しているばかりでなくて、神さまに対しても己を義認している。

「この驚くべき神さまの前に誰かよく立つことをえんや」

と詩篇130篇にあるとおり、誰も神の前には実は立てない。相対的に人との関係においては、なるほど、己を義としてよいこともあるでしょう。けれども、人間の魂の問題、道徳の問題というものはただ横の関係ではない。それは縦の関係から始まる。イスラエルのモーセの十誡——「十誡」は本当は十言という——「モーセの十言」というのは、神さまと人間との関係がまず先に立つて、それから人間同士の関係というものがある。始めの四つは神との関係、後の五つは対人関係、まんなかの五つめの

「父母を敬え」

というのはちょうど縦のような横のようなものでしょ。

●いかにして神の前に義たり得るか

モーセの十言というのは縦の倫理である。縦の道である。その神さまに対して、果たして自分が義ただしいかという問題になつたら、それはみんな落第です。人間に対して相対的には義しいことがあつても、神さまに対しても義しいかということになつたら、みな落第です。

マルチン・ルターが苦しんだのはそのことです。

「いかにして自分は神の前に義たり得るか」

という問題で彼は苦しくなつた。どんなに戒律を守つても、みんなにどんなに模範僧と言われても、それは自分は決して喜ばしく——ちょうど、水が上から下に流れるように——心からやつていない。内心はちょっととも嬉しくない。それがルターの苦しみで、とうとう独房でぶつ倒れてしまつて、もう少しそのままにしておけば、ルターは死んでしまうところだつた。彼があまり出てこないから、坊さんが独房の戸を蹴破つて入つてみたら、ルターは真っ青になつて倒れていた。これは彼自身の告白の中に書いてある。それくらい彼は、神の前にいかにして義たらんかという問題に苦しんだ。ここに宗教改革が始まつた。そして、彼は自分が神の前に義たり得たかというと、成れなかつた。降参した。平伏した。神の前に降参した。

●神との交わり

神の前に降参しないで、自分を義とすることは、どんなに立派であつても、人間は手放しではダメです。もし立派であると言うならば、それはどこから来ているか。神さまから来ている。パウロも、まだサウロという時代の、

「律法の義については責むべきところなし」

というその立派さも実は、その結果も本当は神さまから来ている。それを神のものとしな



いところにとんでもない間違がある。

「神—律法—イスラエルの民（人、我）」という関係で、一生懸命で「律法と我」というものを整えようとして、律法に対して、律法という神の言そのものを客体化してしまっている。そして、一生懸命でそれを外側から守っていたわけです。そういうことでは、パウロはなるほど良さそうだけれども。実は、律法は神の言であって、神の生きた聖なる意志がここに通っている。神さまの聖なる意志の発現としての、神さまの聖なる意志のロゴス化なんです。しかしながら、ロゴス化と言つたつて、これはいつも律法の中には神の聖なる意志の血が通っている、神の靈が通っている。だから、私は「律法」と言わないで、それは本当の意味においては聖法であり靈法であるというわけです。聖なる法であり、靈なる法である。聖法、靈法というものを本当に受けとるためには、神に対する信頼がなかつたらば、神との交わりがなかつたなら、それは全うできない。それを本当に神との交わりにおいて律法を貫いてしまつたのが、ナザレのイエス・キリストという唯一人の義人である。だから、彼の

「汝の御意を成させたまえ」

と言つて自分を提身しているこの角度に本当の義というものが通ずるわけです。「汝の御意を成させたまえ」というのは、何か「正義」ではない。御意の成らしめられてある事態が義である。その御意そのものが義であるわけです。

そういうような関係から切つてしまつて、自分を義としていることは、どんなにそれ自身が良くても、それはダメです。電灯は、その電源を切つてしまつて、蓄電池でもつて光ついていても、そのうちにだんだん暗くなつてしまつ。本当に光つてているのは、いつも電気が電源から来ているから。電源から来ていないうな、蓄電池みたいなような義が人間の小さな義です。そんな蓄電池の懐中電灯でもつて人を照らして、お前のほつぺたに墨が付いているなんて言つてみたつて、それはダメです。

●私が取り除いてやるよ

それが即ちキリストの言われたところの、

「己の梁木（うつぱり）を——自分の義を大いに立てて、そして人のちょっととしたものを大いに問題にしていから——取り除け」

ということです。キリストはその後は言つておられない。どうやつて取り除くかは仰らない。

「己が目から梁木（うつぱり）を取り除け」

と、キリストの言は説明的でない。みんな断言的なものだから、だから困る。「取り除けよ」と言うから、

「それでは一生懸命で取り除きましょう」
なんて言つてやつてている。



或る人が

「今度は、先生の集会へ行つて、大死一番したいと思います。云々」

と、私に非常に熱っぽい手紙を寄こしてきました。私はそれを断つた。

「私は大死一番できませんから、あなたがいらっしゃつても、失望なさるから、どうかやめてください。私はあなたの期待に添うわけに参りませんので。私はダメですから、ご遠方からいらっしゃつても無駄ですから、やめてください」

とお断りした。私は自分で大死一番できない。私はその手紙だけでその人を、ただ文字の上から断つたのではない。全体のその行き方に對して、信仰の質たちがどうしても違いますので、そしてそういう言葉に表れてくるから。

「そういう大死一番式な信仰の方々の群もありますから、そちらの方があなたには良さそうですから」

というようなわけです。

⁵偽善者よ、まず己が目より梁木うつぱりを取り除け、

キリストが「梁木を取り除け」と言つたつて、梁木を取り除け得る人は一人もいない。だから、キリストの言はみんな不可能なんです。その言を額面通りにそのまま自分で手放しに受けとろうとしたら、それは不可能です。どのキリストの言にあなた方は及第できるでしょうかね。私は絶対にできない。私はもう落第です、完全に落第生です。零点。マイナスかも知れない。取り除けない。

しかしながら、キリストは不可能なことを遠慮なしに仰る。それは、彼がその可能の力を、可能の事態をちゃんと自分が持つてらつしやるから。だから、

「取り除けは、私が取り除いてやるよ。心配はいらん」

と、そういう声が後から響いてこなければ、それを受けとらなかつたらキリストの言は受けとれない。そこなんです。「取り除け」と仰るかたは無責任なたではない。私たちの人の先生は無責任です。自分は余り勉強しないくせに、勉強しろなんて言う。そういう先生はダメです。私もしばしばそういう先生だけれども。キリストが「取り除け」と仰るこの言にはちゃんと責任を持つて言つてらつしやる。

「言つ者は私である。私に来てごらん。そしたら、私が取り除いてやるよ。心配はいらん」

と。それなんです。キリストの言は恐ろしいけれども、本当は恐ろしくない。だから、その言の中に入つて行きなさい。キリストの言は神の言と同じように、「取り除け」という法律的なことを言わながら、実はキリストはその「取り除く」ところの実力を与えている。だから、心配はいらんと。



●充満しているところの無

そして、取り除けたらば、私たちは自分の義からはずされてしまうわけだ。それからはずされてしまう。即ち、自己義認というのは要するに、我に執すること、我執しているわけです。それが良かろうが悪しかろうが、良いものであろうが悪いものであろうが、とにかく自分の持っているものに執着していることはみんな「罪」なんです。我執というやつです。聖書の学者かもし、ギリシア語やヘブライ語ができるなどを鼻にかけていたら、それは我執ですよ。そんなのはダメです。この我執というやつをすっかり抜かされる。

さらば明らかに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

そうしたら、どうですか。日本人は一番よくわかる。私がない世界に入つていく。無私の世界に入つていく。私心がない。私がない。私心というやつがなくなつてくるから、無色透明である。曇りがなくなつてくる。曇りがなくなつてくるから、相手の小さなゴミが今度は見えてくる。見えてくるけれども、曇りがないから、この見えた者が、

「お前はそんなものがある」

と言つて審かないんだ。見えたつて、審かない。

「塵を取り除き得ん」

と、今度はキリストは仰る。

「それはああ、痛かろう」

と言つて、それを取り除いてあげることができる。同じく相手の欠点や何かが見えましても、それを審いて見ることがない。審いて見ることは、自己に執している自己義認というやつです。光がきて、そしてそれでもつて相手の者のゴミを取り除き、暖め、痛みや苦しみや悩みを共に感じ、共感してこれを取り除くことができるようになる。ここにキリストのこの譬えの言の素晴らしさがあると思う。

私が言うところの「無私」だとか「無」だとか言うことが、何か冷たいとり澄ました聖きよさというような具合に考えられたら、私は非常に困る。そんなことを言つてはいるのではない。無という表現に私は決して執するわけではない。こんな表現なんかに執着しているのではない。

だから、無は即、無限の内容をもつてている。無は即、無限です。空無ではない。虚無ではない。充满しているところの無なんです。真理というものは矛盾の表現でしか言えない。

「へエー、そういう充満している無ですか」

なんて。それは自分が充満しているのではないんだ。他のものが充満している。

●天鐘

私は自分の号を「天鐘」と申します。ちょっと偉そうな名前だけれども、これを偉そうに思われたら困る。私はお寺の除夜の鐘を聞くことが好きです。ある時、聞いて瞑想して



いたら、ある真理にぶつかつた。即ち、東洋の梵鐘^{ぼんしょう}にはベロがない。中に何もない。ベロがなければ鳴らないかというと、これを撞けば、ゴーンと鳴る。なぜ鳴るかというと、その中には天空が宿っている。天が入っている。天に抱かれ、天を宿しているという素晴らしい境地です。だから、撞けば、鳴るものは即ち天なるか鐘なるかというわけで、そこで、「天鐘」という名前にした。即ち、天と鐘とが一如の相である。これは私が自分でとり澄まして天鐘一如になつたなんて決して申しません。これは私にとつては恩寵の事態なんです。この天は即ちキリストの聖靈である。聖靈が私の中に充满したもうときに、

「聖靈のキリストと我とは一つ」

という恩寵の事態を悲願として申しているだけの話で、現実に私が天鐘一如の事実でありますたなんて言つたら、それは自己義認だ。そんなことを言つているのではない。私は自分の悲願をただ表現しているだけの話です。

そういうようなのが即ち、無にして充满したところの事態である。だから、自己に執した、そんな判断や何かでものを見ているようなことではなくて、樂に己^{うつぱり}が抜けたときに本当に天的な認識ができ、またその認識は愛の認識ですから、本当に歓びの世界に相手を変えていくことができる。これが即ち、

「審くなれ」

から発しているところのキリストの聖言のこころではなかろうかと思う

ただ、今私が言つたなかで一つ残つてあることがある。

「己^{うつぱり}が梁木^{うつぱり}を取り除く」

とはどのようなことであるかということです。

●内村鑑三の本を求めるよ

⁷求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。⁸すべて求むる者は得、たずねる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。⁹汝等のうち、誰かその子パンを求めるに石を与え、¹⁰魚を求めるに蛇を与えるや。¹¹然らば、汝^あら惡しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物^{たま}を賜わざらんや。¹²然らば凡て人に為^せられんと思うことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

全体が詩のような言ですね。

「求めよ、尋ねよ、門を叩け」

と言う。女人人は百貨店にいろいろなものを求めに行きます。学生はいろいろ社会主義的な思想を求めています。20世紀の今日、日本のいろいろな人々はみんなやはり何か求めている。何か足りなくてしようがない。けれども、本当に求むべきものを求め、尋ねべきも



のを尋ね、叩くべきものを叩いているかというと、みんな見当違いというわけです。

「問題多き日本の現状である。健全なる日本文化の進展はいかなる精神によるべきか。

聖書こそは創造的精神の源泉である。聖書の精神を深く掘んだ内村鑑三の本註解全集

は必ずや聖書に対する一般の先入観を吹き飛ばして、これに親しましめ人生と文化に

対する創造的意欲を与えてやまぬであろう。」

と、私は内村先生の註解全集に対して紹介の言葉を書いておきました。もつと詳しいことを『興文』という雑誌の紹介文に書きましたから、読んでみてください。

日本の青年たちに、何はさておきどの本を買えというならば、求めるべき本は、いきなり「聖書」と言つても、それは無理だろうと思うので、内村鑑三の書いたものを薦めたい。たとえば、『一日一生』、これを本当に毎日電車の中ででも読んだらいい。これを読んで魂の変わらないような青年だつたら、私はもう望みはないと思う。それくらい、内村先生のものを私は第一に薦めたいと思います。この頃、痛切にそのことを感ずる。青年に限らない。内村先生のものは誰が読んでもいい。本当に日本人らしい日本人であり、かつまた本当に世界的な人です。臭みのない人です。内村先生という人は、自分を全身をもつてぶちまけてものを言つている。概念的なことを言つて三段論法でものを言わない。

そういうわけで、今、青年に一番読ませたいのがこれである。私はそう言うのだけれども、東大の学生も、早稲田の学生もどれくらい読んでくれているか知らん。内村先生の「聖書大意」の中の「創世記大意」というところを読んで、聖書を読もうという志を起こさないような青年だつたら、私はもう望みなしと言つてもいいくらいに思う。やれ、サルトルだとか、カミユだとか、変てこなものばっかり読んでいて、どういうことですかね。とにかく、今は全体が狂つてますよ。思想の方でも、絵画の方でも。脚の先に目玉が付いてみたり。どうもみんな変てこです。

やはり、古典的なものは残つていく。プラトンのものはいくら古くても、哲学では何といつても大きなものです。レンブラントとかダビンチとかいうような画家は何といつても天來の響き、迫力をもつたものです。何といつても、本ものはみんな天來の或る絶対境にぶつかつて、そこから発したものです。どういう人がどう判断しても、やはり本ものは遺る。その本ものに、聖書という本ものに取つ付くのに、まことに恰好な内村鑑三」という預言者が現れてきた。これをなぜ読まないかと、本当に残念でしようがない。今、青年に「求めよ」というのは、

「内村鑑三の本を求めるよ」

と私は言つてやりたい。お金がなかつたら、断食して食費を節約しても買ひなさい。他の本を売つても買ひなさいと。なにも私は内村先生の本の宣伝をしているのではない。本当にそうだから、そう言つてゐる。



●キリストを求める

もちろん、

⁷求めよ、然らば与えられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。

と、キリストが言われているものは、その後に出ているところの、¹¹まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜わざらんや。とあるように、

「天の父に求めよ」

ということです。キリストの言はいきなり、

「求めよ、尋ねよ、門を叩けよ」

と言う。「誰に求めよ」と書いてない。どこの門を叩くのか。

「何々集会の門でなければダメですか」

なんて。日本中、どこの集会の門を叩いたつて、それはダメですよ。私たちはこうやつて一緒にキリストの門を、キリストという門を叩いている。キリストは

「父（神）に求めよ」

と、この場合は言つてらつしやるけれども、どこに本当の父を顕しているものがあるか。それは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言われたキリストです。神さまに求め、神さまが一番下さりたいものを求めよと仰るんだけれども、私たちにとつては、父を最もよく示してくださつて、その子であるところのキリストを求める。キリストをいざこに求めるか。聖書に求める。聖書のまた何處に求めるか。福音書に求める。福音書はやはり聖書のアルファにしてオメガです。「始めにして終り」なるところの中心である。始めは創世記であり、終りは黙示録です。けれども、また福音書というのがそういうものです。またある意味において、福音書は心臓部、中心と言つてかまわないでしよう。

「イエス・キリストを求める。イエス・キリストを尋ねる。イエス・キリストの門を叩く」

他のものを求めたら、得そこなうことはある。あるいは、得て失望することはある。

あなた方は、もし小池辰雄なんていうものを求めてきたら、それは必ず失望する。私に何か、そういうふたような意味において、やつて来る人は必ず、いい加減たつと去つて行く、躓いていく。私はハツキリ言つて、

「私を求めている人は躓く。私という人にキリストを求めている者はどこまでも一緒に行ける」

と。「我を見し者は父を見しなり」と言うイエス・キリストを求め、これを尋ねる。この門



を叩いたならば、失望することがない。当てはずれがない。他のことではどんなに失望しても、ここにおいては絶対に失望がない。イエス・キリストに来て、失望したら、その失望する方が間違いだ。その他のものを求めたら、失望された方が間違っている場合もあるでしょう。

●十字架のキリスト

⁹汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を与え、¹⁰魚を求めんに蛇を与えんや。

あのパレスチナの石ころとパンは似ている。それから、魚と蛇は似ているものだから。しかし、魚を求めているのに蛇を与えることもしなければ、パンを求めているのに石ころを与えることもしない。

¹¹然らば、汝ら^あ惡しき者ながら、善き賜物^{たまもの}をその子らに与うるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物^{たまもの}を賜^{たま}わざらんや。

「惡しき者」というのは「罪びと」ということです。お前たちは善きものを子供たちに与えてやる。まして、天の父は一人ひとりに最大のものを、これは他のものとは掛け替えのないというものを与える。言うまでもなく、ルカ伝に書いてあるとおり、これは聖靈のことです。

さあ、困るですね、「聖靈」と言つたつて。私は無教会にいたときに、聖靈のことは余り聞かないし、

「聖靈を求めよう」

なんてことも余り思わなかつた。「三位一体」と言つから、聖靈というものもあるらしいくらいに思つていた。實に無教会の信仰というのはそんなものですね。何とはなしに、聖靈のような感じくらいに思つていた。聖靈というのは、いわゆることに茶碗があるように見えるものではない。

問題をしづつしていくと、大事なことは、

「己^{うつぱり}が梁木^{うつぱり}を取り除け」

「聖靈を求めよ」

というところにしづらされて来る。そこで、次第に問題の本論に入つていくわけです。

私たちが神さまの御意を、また善を本当に心からなし得ない、という大きな妨害を、ブレーキをみんな持つてゐる。それが即ち、どうしても抜けない刺^{とげ}であり、「梁木^{うつぱり}」という刺です。それは除けられない。外科手術をして取つてもらおうとしても、誰も取れない。人が人の目の中の梁木を取れない。そんなでつかいものも取れない。どんな名医もそれを取れない。この大障害物を取つてくださつたのが、誰あろう、十字架のキリストです。十字架のキリストがこの自己義認を、とかく傲慢になる人間というやつを、人を審いたり押し退けた



りするやつを、本当に人を愛することが出来ないやつを取り除いてくださった。決定的な手術を施してくださったのが、このキリストの十字架です。

詳しい説明も何もいらない。十字架そのものはいかなる意味があるか、私は説明できない。人間が説明しつくすことができない。また、説明しつくしても、どうにもならん。これがやはり、彼の生涯にぶつかり、聖書にぶつかって、そして、

「ああ十字架とは！」

と各自が感激するより他はない。

『ベンハー』という映画が今来ますね。あそこに十字架の深刻な場が出てくる。私は、ある意味において、目を伏せたくなる。キリストの厳かな十字架の光景ですから。日本人大方のひとはクリスチヤンでないから、あれを平気な顔して見てますけれども。我々がその当時のキリストのことを思つたら、それは簡単に見ていられない。大入り満員で空前の長期間の上映となつてゐる。日本人というのはおかしな民だ。一体何に感激しているか。あの大きな、戦車の競争くらいを見に来るんでしょうか。あの一杯の水を与える光景だから、あの十字架、キリストの光にあつて本当に恵みにあずかっている癩病人……。地方からいらつしやつた方はもし時間があつたら、東京で見てお帰りになつたらよろしいかと思います。クリスチヤンは見かたが違うからね。全く確かに傑作です。ああいうところを見て、私たちも魂の奥底から或る呻きを、うなりを覚える。それが十字架です。

● 我既に世に勝てり

内村先生の『一日一生』の8月19日のところに、

「キリストいわく、『懼るるなけれ。我既に世に勝てり』と。道義学者ならびにユニテリアンがなんと言おうとも、福音的キリスト信者の安、心勇氣の大源泉は、實にキリストに於ける既得の勝利に存するなり。我的為すべきことはキリスト既に我がために為し遂げ給えり。我的義は彼に於て既に天にあり、我は既に彼の死を以て贖われたり、我の得べきものは我既にこれを得たり。いざ残余の生涯を報恩の戦いをして楽しまんと。これ實に真正のキリスト信者が常に泰然として余裕あり、老いてなお壯なる所以なり。」

こういうのが内村先生の言葉です。即ち、「我既に世に勝てり」と言う。

「我既に汝の中のその『己が梁木』を取り除けり。汝の罪を既に贖い取れり。汝は既に罪無き者、罪から解放されたる者である」

と。あなた方はどんなに過去に罪があろうとも、どんなに今現在、悩むことがあろうと、なにをか懼れん。既に解放された者です。既に自由なる者です。現在まだ犯すであろうところの、将来まだ躊躇であろうことを、いつまでも心配していて何になるか。キリストはそれらすべてのものに既に勝利してしまった。私たちの魂の一切のいかなる問題も、既に



問題は解決済みである。

ぞ

と。だから、私は大死一番しないんです。私は相変わらずダメかも知れません。けれども、こんなダメな男が、どんな靈的ないわゆる靈力的なクリスチヤンが来ましても、私はびくともしない。何となれば、私が因り頼むのは、

「我既に世に勝てり。汝を贖いたり」

というこのイエス・キリストであるから。キリストが私の一切であり、私はどんなにガラクタであろうとも、私はどんなに泥の器であろうとも、わがうちにキリストの元始力が、この贖われたる者の中に必ず来るから。贖われたるその解放の歓びをもつてキリストに向かつて行けば、キリストは解放し放しで、そこを空なるところには絶対置きたまわない。

「我が復活の生命を、わが靈を汝に与える」

と。これはパウロが言つてゐる通りです。ローマ書4章25節に、

「主は我らの罪のために付され、我らの義とせられん為に甦えらせられ給える

なり」

と書いてある。キリストは私たちの罪のために十字架にわたされて、私たちを無罪放免にして、私たちを義とせんがために甦つた。キリストの生命は私たちにこの生命を与えて、神との交わりの世界に入れる。「神・キリスト・我」というものが生命の交流の世界に入る。神の御意が立つてゐる縦の関係が、このキリストの生命、聖靈によつて貫かれてゐるところが即ち「義」です。

「我らの義とせられんために」

とはそのことです。パウロの言葉がどれほどその当時のいわゆる律法的な内容から発した言葉であろうとも、福音としての義というものは既にそんな固苦しい義ではない。

●靈力的宗教か、道念的福音か

私は相変わらずマイナス99であるかなんか知らん。けれども、このマイナス99というしょうがない奴の中に、絶対にもの凄いところの聖靈の1が来ている。キリストの十字架の恩寵が既にそのことをしてくださつたことに、私は全身をもつて「はいっ」と言つて無条件に受けとる。こちらが悟り澄ましてみたり、或は滝浴びをしてみたり、火渡りなんかして行くのではない。私はあるがままそのまゝ、このキリストの十字架を、もうそのまま「はいっ」と言つて——

「おさなご幼子の如く受けよ」

と言うのだから——幼子の如く受ける。そうしたらば、イエス・キリストの聖靈の1がこの中に入つて、この1が驚くべき1で、このマイナス99を必ずやつつけてしまう。



「信仰より信仰へ行かしめ、恩寵より恩寵へ、力より力へと、ついにキリストの相に化する」

ということは、この神の聖靈がなしたもう事実であるから、この確信ならざる確信があなた方の中に来たらば、そのときには、あなた方の中に聖靈が必ず来ている、内住しつつあるということの証拠です。

「いかなるものがあつてもキリストのこの恩寵を拒むことができない」と言える人は、これは聖靈の人です。

私はもはや、人間私というようなことを問題にしない。もはやそんなものには興味がない。人間的ないかなる宗教的なことも、靈力的なこともこの福音とは違うということを、私は今度の藤井先生の記念号の

「靈力的宗教か、道念的福音か」

という文で、たつた一頁だけれども、宣言した。これは或る方面の、或る信仰の在り方に対する、「ナイン！」（いな）という私の声です。

私はそれらの人たちが全部間違っているとは決して申しません。善きものもたくさんあります。決して人を審かない。

「その信仰がどうだ」

とは言わない。けれども、その事態の福音の構造からして、私がどうしても承服しがたいことに対する、私は私の道を行く。同じ群にありながら、そちらの方に、その集会に合流した方々があるから、

「どうか、こちらの集会にはいらっしゃらないでください」

と私はハッキリ申します。それで、今度の集会にも幾人かの人はお断りしたのです。このような事態が、人間的に友情としては残念であつても仕方がない。この福音を私は棄てるならば、私はキリストに対して申し訳ないから。キリストに対して申し訳ないことは、私にはできない。この恩寵をいがんせん。

● 精神的道念

神さまの賜物は喜んでこれを受ける。しかしながら、賜物を受けるにはちゃんと場がある。角度がある。賜物中の賜物は何か。聖靈である。この聖靈を受けて、そこに本当に神中心、キリスト中心になつて、キリストの榮光が現れる。自分が本当に平伏しているならば、どんなに賜物が現れても、それは結構なことです。彼等の群がそうでないとは、私は言うのではない。そういう面もあるでしょう。

しかしながら、私が始終言わなければならぬのは、或る一つの色に塗りつぶされたような宗教的な現象事態ではなくして、一人ひとりがそれぞれの職業、それぞれの生活の仕方をしながら、その中に本当に福音が楽に、しかし本当に底力をもつて浸透する、その在



り方を私たちは「福音的」と申したいのです。皆さんのがぞんnaに奇蹟的に靈的に素晴らしいなつても、それはただ目には珍しく、人を驚かすにはいいでしよう。

しかしながら、本当に人の心を打つものは、人間の全存在を打つものは、この道念的なものです。人間というものは人格的、道念的存立であることが、私は根源であると思う。これを犯し、これが危うくされるようなことであるなら、どんnaにそれが宗教的であつても、それは福音的ではない。その点において、皆さんの自覺を新しくしていただきたいと思う。

このことは、マタイ伝の7章のもう少し終りの方にいくとハツキリします。これが即ち、キリストが「梁木」と言われたこと。自己の或る宗教的な賜物というものを知らないまに私して、

「俺たちはそれだけの靈的な業ができる」

といつたその角度が見える。そして、人を見下している。それは靈的傲慢というやつで、靈的傲慢はサタンの角度になる。これは一番恐ろしい。サタンは

「神と等しからん。お前たちは神の如くならん」

と誘つてくる。キリストはそれに対して

「^{いな}否！」

と言つて戦われたのが、あのサタンとの曠野の戦いである。サタンは

「お前は神の子であるから、頂きから身を投じてみろ、天使がお前を救つて死なないぞ」

と。奇蹟をキリストは決してそのような意味において私なきらなかつた。キリストは石をパンになおされない。どこまでも、

「汝の御意を成させたまえ」

と言つて、神さまの義が立つことをキリストはなさつた。キリストの福音は、キリストの業はすべてそうです。福音書に現れているその驚くべき構造が読めてないものだから、群衆はキリストの神癒やいろいろな恵みにあずかつて、本当の信仰に入つていなうんです。彼らは賜物に引かれて行きます。だから、キリストの前にはたくさん群衆が来て、押し合ひへし合ひだつた。けれども、彼らは本当の信仰には入らなかつた。本当の信仰に入つたのは使徒たちだけ。本当にペントコステを受けた人たちだけ。

また、ペントコステを受けながら、その聖靈が十字架において本当に受けとられていいないと、聖靈の事態は或る意味において一時的な善さがあつても、それがまた脱落していく。十字架がしつかりその中に入つていなから。

本当に神さまの前に自分がぶつぶつされ、キリストからこの無罪の事態を受けとつて、



自分がどん底において碎かれたる者、どん底においてそういうた傲慢から本当に外された者は、

「一切は神のものなり、キリストのものなり」

という根底的な自覚のある者は本当に聖靈の人です。私は、そうでなければ、聖靈の人と言いたくない。一番、聖靈に反することは靈的傲慢というやつ。靈的傲慢というやつが、どんなに素晴らしい事をやつてのけようと、私は驚かない。私は却つてそれを危険だと思う。それは宗教であるかも知れないが福音ではない。その点で私は戦う。仕方がない。

或る方々がその方へ引かれたから、

「そうではありませんよ」

と私はハツキリ言います。あなた方がどんなに仰つても、それはしようがない。私はやむを得ず、袂たもとを別ちます。の方々にももちろん人間的に立派な方々がたくさんあるから、私は人間を攻撃しているのではない。人間を攻撃しているのではないが、その事態に対しても私はどうしても「然り」とは言えない。止むを得ない。しかも、の方々は

「神のご命令によつて、そこへ行きました」

と仰るから、私はまた何をか言わん。ただ私としては、お別れするだけのことです。

しかし、皆さん、私は今、止むにやまれずして、かくのごときことを言わざるを得なくなりましたけれども、どうか、これをうわざことや何かでものを仰らないでいただきたい。どうか、ここだけの話としてください。私はその人たちの人格を尊重したいから。人格を尊重することと、私がその事に対して「否」と言つたことは別問題であるということをわきまえていただきたい。

●十字架におけるバプテスマ

「求めよ、さるば与えられん」

と言つても、私たちは手放しで求めてはいけません。キリストは十字架をもつて自分の全生涯、福音書全体に対するところの本当の求める場をここに与えていらっしゃる。十字架の下、十字架・復活の光の下でなければ、福音書は読んでは間違えます。その意味において、この十字架を通して初めて、私たちは「梁木」が取り除かれてあることに気がつく。既に、梁木は取り除かれてあつた。大死一番するのではない。大死一番されてあるのです。私が大死一番するのではなく、キリストが私の代わりに大死、一番してくださつたから、その恩寵を無条件に受けとる。私は罪ひとだから、その他のことはできない。

とにかく、今までの私は無教会に永いことお世話になつていたけれども、この十字架即聖靈降臨ということになつてきましたならば、本当に十字架を受けとるとはどういうことであるかということが、いわゆる無教会のそれとは違つてきた。無教会は角度はいいんだけれども。聖靈の受け方が——内村先生はもちろんその中を突破もしてらつしやいました



が——まだ火花している事態であつて、それが本当に常恒的に先生の中に燃えていたならば、先生の言葉にはもう一つ別な光と、もう一つ別な響きが出てきたと思う。そこが内村先生について私が或る程度残念に思うことなんです。

けれども、先生は先生の役割を充分お果たしになつたので、私たちは、

「お前たちはその先をいよいよ行け」

と言われているわけです。キリスト教の歴史はお互いにそれぞれの役割を果たしていくのとで、一人が全部なんかとてもできやしません。私なんかが果たす役割はごく小さな一部分に過ぎません。

「善きものを賜わざらんや」

と言う。なるほど受けとられていることはすべて、梁木が外されることも、聖靈を受けとることも、この十字架に於てです。十字架におけるバプテスマということです。

そういうわけで、12節までが本当に今度は、皆さんの腸の底にこの文字が生命となつてくる。力というのは靈力ではない。そのような本当に聖靈に於ける神の正しい福音の、靈的道念とでも表現したいような事態が深く入つてくる。パウロの謂う

「福音は力なり」

とは、そのような角度に於て私は「福音は力なり」と申します。

●せざるを得なくなつてくる

¹²然らば凡て人に為られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

これを「ああ、出来ません」と言つて、クリスチヤンは嘆く。

「人に為られんと思うことを人にもせよ」

とは、聖靈のキリストがそのようにして入つてくれば、それはせざるを得なくなつてくるわけです。せざるを得なくなつてくる。

してもらいたいと思うことは、神さまから私たちにしてくださつて。キリストを通して、してくださつて。現象的にではないですよ、根源的に私たちの中に來て。最大のものが、最善のものが、無限なるものが來て。だから、それによつてもう、してもらいたいと思うことがみんなこれは成就して。いるんだ。神さまは何でも、私たちに本当の意味において、もう現在完了形的に來て。いる。だから、

「もう、お前さんはキリストで満たされて。いるではないか。それでは、せられんと思ふことは、どしどし人に出来るようになるじゃないか」

それは事実としては、私たちはそれを文字通りには出来ませんよ。出来ませんけれども、私たちの中から發するものに今度は無理がなくなつてくる。無理がなくなつてきて、とにかくそれがどんなに惨めな現れかたでも、本ものが出てくる。偽物でない、外側が立派と



かいうことではないものが出てくる。それが人の心を打つんです。それが本当に人を喜ばす。

●四つの非ず

¹³ 狹き門より入れ、滅びにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者おおし。¹⁴ 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

私は今度初めて、かく狭くされたらば、キリストのこの言が本当に腸にしみてきた。

「観念に非ず、御利益に非ず、パリサイに非ず、靈的傲慢に非ず」

ということ。そこが狭き門、細き路です。「パリサイ」は、さつき言つた、人を審く「梁木」のやつです。「靈的傲慢」は、賜物にいい気になつて、その賜物をもつて人を見下すような、靈力的な信仰者です。「観念」は、聖書を研究してばかりして、頭でもつてつかまえている方々。私は何ものでもない。私はこれらに対して一番優れているなんて絶対に申しません。この四つのものでないということ、この四つのものでありたくないということだけは確かなんです。私は、この四つのものでありますから、一緒にこの福音の戦いをして行きたいと思う。旧約においては預言者たちがそうでありました。彼らはみなほとんど孤独のような人たちです。

この十字架の下において聖靈のバプテスマを受ける場、これが即ち「狭き門」です。この「狭き門」というのが、ただ祈り三昧で、

「聖靈、聖靈」

と言つて何かエラク高揚してしまつて、幻を見たり、み声を聞いたりとか何とかというのも、それはあるでしようよ。けれども、十字架が抜けたようなところは、私はとにかく賛成できない。我々にとりましては、この「狭き門」というのは、十字架という門である。しかも、その十字架は本当に——

「聖靈滝の如く流れる」

とあるが——十字架に聖靈の滝が降り注ぐような、そういうところが私たちにとつて「狭き門」です。この門を通れば——いつか「無門の大道」という文を書きましたが——路は細い。今の「四つの非ず」と言つんですから、路は細い。路は細いけれども、行き先は實に広々としたところの果てしなき世界です。

¹⁴ 生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし。

この「生命」という字はもちろん「ゾーエー」という「永遠の生命」に関する言葉です。

「之を見出すもの少なし」

とキリストは言われる。懼れるなれ、悲觀するなれ。「少なし」と言う。何百人とか、何千人とか、何万人とか言うのではない。六十人、七十人。三十人、二十人、十人。藤井先生の所なんか十二、三人。いつもそんなもの。けれども、少ないのが、少ないから良いのではない。少なくて消えてしまつたらしようがない。しかし正直、真理は少数者に隠され



てある。

真理は万人のものですよ。決して、特権階級のものではない。福音という素晴らしい真理は誰でもが絶対無条件に得られる、世界中の人人が得られるところのものです。そうであらながら、これが本当に少ないというのだから、何と言ふことでしょうね。そこに人間たちの「梁木」があるわけです。

さつきの「四つの非ざるもの」、靈的傲慢、觀念、御利益、パリサイでないもの。神の御意の行ぜられる、現れるところ。榮光の現れるところ。

「自分は神の前に本当に何ものでない」

と言つて、本当に聖名の崇められるところ——口ばつかりではない——本当にそういうところ。そこは「狹き門」「細き路」である。しかしながら、そこは、その人たちは本当の意味における永遠の生命です。本当の意味における福音の世界を行くものである。しかもそれは実は、キリストは「少ない」と仰るけれども、キリストは全世界の人にその道を歩いてもらいたい。誰にでも与えたいのですが、事実は少ない。少ないからこそ、キリストはいつまでもその十字架をもつて——パウロが言つたとおり——天界から見ておられるわけです。

「屠ほふられたるが如こひつじ羔羊の立てる」

とヨハネ黙示録5章6節にあるようなわけです。

● 恩寵における碎け

それは、私たちの側を言うならば、恩寵における碎けです。私たちは「凡人ただひと」である。何ものでもない。私は何になるか、凡人になる。ただし、その凡人においてキリストがその人らしく十全に現れたもうところの凡人でありたい。その人らしくですよ、人真似ではない。皆さん一人ひとりは掛け替えのない神品である。神の品である。私はとにかく、人ひとりの人格の自由を絶対に尊重します。全体を何かで統括しようとしてみたりすることは、私は大嫌いだ。

皆さんを本当に神のものとする。人格の尊重というのはそういうものです。そこにおいて神の榮光が現れる品であるからです。この自覚が本当にあるところには、聖靈の安らかさ、本当の底力がある。これは皆さん、だんだん経験なさる。何も恐いものはない。

何か素晴らしいものをもつて、イエス・キリストのこの恩寵に水を割らんとする、人間的な宗教的なものをもつて福音に水を割らんとする者に向かつては——最大の罪は靈的傲慢というやつで、これはサタンの味方だからしようがない——私はそういう在り方に対して、もし私の認識が間違いでないとしたら、それは否であると言わざるを得ない。

なぜ、神さまは私みたいな弱虫のダメなやつを選びなさつたかということが、しみじみ分かる。それは福音は、もし私みたいな者が救われなかつたなら、誰も救われない。私が



救われる最後の人である。パウロが

「**我は罪びとの首なり**」

と言つたが、パウロは本当の意味で、そうですよ。そして、罪びとの首となつてくださつたのが正にキリストである。私は罪びとの首なんてなれない。罪びとの首となつてキリストが十字架を負つた。そのことがパウロの言の後ろに響いてくる。

●福音的実存の路

私たちはこの狭き門を通つたら、実に細き路ながら、天下の大道よりも大丈夫な道である。一人ひとりが本当にその足をもつて通る路です。「路」という字は「各々の足」と書く。あなた方が各々の足でもつて歩くところが——キリストは

「我は道なり」

という道である——道と路が一如となるところの世界が本当の実存的な福音的実存の路です。

皆さんに既に今晚もう、深い意味において聖靈が来ているんです。この十字架の前に絶対無条件にそのまま、

「ああ、キリストにこんなにもして、私は贖われていましたか」

ということに気がつくだけのことなんですから。自分で大死一番するとか、何とかするとかということではない。

マルチン・ルターが、ローマの階段（きざはし）を膝で昇つていけば何か供養があるようなことでもつて、階段を昇つて行つたところが、

「義人は信仰によりて生くべし」

というハバクク書の言が貫いてきたら、スッと立ち上がりて階段から下りてしまつたといふ。

「キリストを受けとることによつて私は生きる。そこに本当に義がある」

といふことに彼は気がついたんです。

私は道念的と言つけれども、何も道徳を語つてゐるのではない。

道念というのは、神・キリスト・我というものが聖靈で貫いてゐる、この御意のきたすところが即ち靈的道念という。

いわゆる靈力的なものとは違うから、『靈力的宗教か道念的福音か』という、たつた2頁の文章だけれども、ここに非常な重さがかかつてゐるんです。

●人間らしく生きているか

それで、キリストが言われた、

¹⁵偽預言者に心せよ、羊の扮装（よそおい）して来れども、内は奪い掠（かす）むる豺狼（おおかみ）なり。



¹⁶ その果^みによりて彼らを知るべし。茨^{いばら}より葡萄^{ぶどう}を、蘿^{あざみ}より無花果^{いちじく}をとる者あらんや。

その果により知らるべしという。人間らしく生きているか。文化人ならば、本当に文化人として恥ずかしくなく生きているか。いろいろな人が、他の信仰のない方々が見ている。

「さすがに彼らはクリスチヤンだ」

と見る、判断の中心はどこにあるか。やはり、人間はみな良心をもつて、その人たちの道、徳的な在り方を知らず知らずのうちに見てているんです。

「聖靈の果は何であるか」

とパウロがガラテヤ書5章で書いてあるとおりです。靈力的な何かのしわざではない。生活において真にそれが、言葉の最も深い意味において、人間的な現れ方をしているか。本当に信頼するに足る人物であるか。そういうところです。

私の友人にH君というドイツ語の同僚がいた。彼は実によく働く。また、学校でもよくいろいろな事を為し、また人のためにも為し、そして自分が本当に正しいと思うことは、遠慮なく言っている、実に男らしい男です。しかし、彼は余りに自分の身体を酷使したために、終に癌でこないだ仆れてしまいました。彼はクリスチヤンでも何でもない。けれども、私はこのようない友人の死を本当に尊いと思う。彼は天国に迎えられているに相違ない。

クリスチヤンなんていうレッテルで天国へ行けるものではない。だから、キリストはマタイ伝7章の終りの方で何と仰ったか。

²¹ 我^わに對^{むか}いて主^{しゆ}よ主^{しゆ}よという者^{しやく}、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。²² その日おおくの者、われに對^{むか}いて「主^{しゆ}よ主^{しゆ}よ、我らは汝の名によりて預言^{よごん}し、汝の名によりて惡鬼を逐^{おと}いだし、汝の名によりて多くの能力^{ちから}ある業^{わざ}を為ししにあらずや」と言わん。²³ その時われ明白^{あらわ}に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

キリストは靈的なものがいかに作用するかをちゃんと知つてらつしやる。靈には諸々の靈があつて、力がなかなか出てくる。しかも、キリストの名を使つてすらも、それが出来る。恐ろしい世界です。問題は本当に神に榮光を歸し、己を神の前に、キリストの前に空しう正在するかということ。

「ケノーシス」（空しき）という言葉がそれなんです。ピリピ書2章5節に、

「⁵ 汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。⁶ 即ち彼は神の貌^{かたち}にて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、⁷ 反^{かえ}つて己を空しうし僕の貌^{かたち}をとりて人の如くなれり。⁸ 既に人の状^{さま}にて現れ、己を卑^{ひく}うして死に至るまで、十字架の死に至るまで順^{したが}い給えり。」（ピリピ2:5～8）
とある。



「己を空しうして、ついに十字架の死に至るまで従いたまえり

と。ピリピ書2章5節から8節は、これは期せずして、内村先生と藤井先生の記念号の扉の言葉になつてしまつた。両方とも。

この「ケノーシス」「空しさ」を、恩寵の世界をいつも魂の世界で本当に受けとつてゐるか。

「御意を平伏して行うものだけが天国に入る」

とキリストが言われた。

「わが意にあらず、汝の御意を」

ということを貫かれたのがキリストの一生であつた。イエスの地上の生涯はただこの一言につきた。

マタイ伝7章というところは驚くべきところです。この狭き門、細き路。しかし、ここに本当に天の道あり、天の生命あり。また、これは人を本当に救い上げ、それを祝福していくところの道である。冷たくとり澄ましたものではない。

私たちはなるほど、今私たちが歩ましめられている路は、門は、狭くして細い門であり路であるというが、路はここにいかなる者があつても決して搖るがないところの、右顧左眄することを要しないところの、本当に何処に対してもこれを本当に開示できるところの、いかなるものよりも本当の意味においてキリストの力を持つてゐるところの、聖靈の実存の自由自在に發すべきところの、かくの如きところであるということを皆さんのが自覺されるならば、私はこの集会はそのためにあると、皆さんと志を共にせんとして参りました。

●（参考）『靈力的宗教か道念的福音か』

（『曠野の愛』第34号、1960年晩夏 藤井武先生召天記念号より転載）

デカルト（1596～1650）が

「われ思つ、故にわれ在り」（Cogito ergo sum）

と言つて、近代意識の道をひらいたことは思想史上あまりにも有名である。さりながら

「この出発点が、救い難くも抽象の途におちじりしめた。人間意識の最も直接的な事実はこうである。〈私は生きんと欲する生命のただなかにおいて、生きんと欲する生命である〉」

と、シュヴァイツァーが言つたとき、彼はむしろ生命的存在の面から深く実存的に告白したわけである。

しかし、もし自然的生命の直接肯定をなすならば、それは却て動物界の如き本能的闘争の自然界であるに過ぎない。人間の人間たるところはその倫理性にある。倫理のないところに人間もなく、歴史もない。シュヴァイツァーの次の言こそ重要な発言である。



「人間は、その人にとつて、植物や動物の生命も、人間の生命と同じく、生命そのものとして神聖であつて、困窮にある生命のために、その人が献身的に救助を与えるときのみ倫理的である」

と。事実、彼はこのように生きておられる。

現代は原子力時代といわれる。現代の魔物は力である。いかなる瞬間にも全世界を地獄と化し得る原子力的武力、そのようなものを創造しつつある人間の驚くべき科学力である。そのような世界に人間の自由の意欲から発する社会的諸現象には、それぞれ真理性もあるが、人間的我欲という本質的な毒素が、ややもすれば限界や秩序を犯す暴力的諸現象となつてあらわれる。もはや現代の深刻な諸問題は、いかなるイズム（主義、主張）をもつても、これを喰いとめることは出来ない。このような現実を深く洞察した現代ロシアの生んだ実存的、預言者的哲人、ベルジアーエフ（1874～1948）は

「われなやむ、故に我れ在り」

と、その『神と人間の実存的弁証法』の中で告白している。実に人生と世界は苦惱にみちている。そして彼は更に、

「人間らしい人間は、愛のある人であり、苦惱を共にすることのできる人である」と言つてゐる。闘争また闘争の世相に、最も欠如しているものは、實に愛である。

この現実、混沌たる魔的なものが百鬼夜行的に渦巻いている現実を、根底から救い得るものは、絶対次元に根源をもつ啓示的宗教の力のほかにない。しかるにその宗教が今や大方無力であるといわれる。しかしながら所謂靈力的宗教が人間を真に救うことは出来ない。何となれば、人間は自然的生命としての存在ではなく、人間は道念的生命の存在であるからである。

キリストの福音は單なる靈力的宗教とは質と次元が全くちがう。旧約の預言者的宗教の特質は、その道義的生命にあつた。これを成就したのが言うまでもなくイエス・キリストであつた。それをイエスは「愛」に焦点せしめた。神への愛と人への愛——愛神・愛人——は一如なりと喝破したもつた。これが

「律法（モーセの十誡の根本精神）であり、預言者（預言者の啓示宗教の内実）である」と言つた。イエス自身が、神の愛の化体であり、神言（聖意）の受肉であるからであつた。このキリストに体現した

「愛が律法の完成」

であるとパウロも告白した。

「われ愛す、故にわれ在り」

と現実の私は勿論言いきれるものではないが、キリストに在る信仰の現実において、すべてのキリスト者はかく告白できるはずである。十字架の贖罪愛のキリストを信じ受けとつてゐるたましいは、



「主われを愛す、故に私は人を愛せざるを得ない！」

と告白できるものを内奥にもつてゐる。現実のずれがどのようにであろうとも、この主の贖罪愛の泉をもつ者は、この天的必然の自由なる愛に生きる。このようなキリストの福音は、聖意を心から喜んで受けとらしめ、生ける聖靈の愛をもつて律法（義）を内側から充たさしめる。信仰の現実とは、この角度のものである。

福音的生活は聖意靈法の成就者たるキリストを信受するところに現じゆく道念的生命としての人間の歓喜と自由と、創造と、愛の生活である。文明世界、文化社会の諸々の錯綜せる問題も、結局は、これをいとなむ人間という主体の道念的生命が、毒せられているために生じてゐる現象たるに過ぎない。それゆえ、二十世紀の今日の最大の問題は、道念的生命たる福音による人間の変革である！キリスト教の無力は、その靈的な愛の生命の枯渇にある。しかしながらここに誤解されてならないことは、靈的とは靈力的ということではない。律法（義）、靈法、聖法、聖意、靈生が一貫一如の相において十字架を貫いて受けとられることを靈的とはいう。そこには神、キリストの贖罪愛の生命がしづかに深く、力づよく動いてゐる。靈力的宗教ではなくして、靈的道念、愛の福音による人間変革こそ根本問題であり、急務である。愛はどん底の荷いである。一切のはでなものとちがう。どんな靈力よりも強いものはキリストの福音の愛の力である。

